



羣書一覽

一





羣書一覽序

牽舟文庫



古人謂天下非無書可讀之為
難但眾書為難焉然石以之者
不獨為已而已所以供天下後
世之讀也故又讀之者先領
畧古人之所以使我長上率至

君言一覽
快之樂者。在於此。一旨。而竟有
至理名言。確不可磨者。在文堆
本朝之右。延喜天曆間。肇讀彼
古之書。其所習。而在詩賦文
章之上。毫無裨政治。故明經
以敷化。稱性。而道理之類。寂而

莫聞矣。畏哉。自時以降。遂歷
千之日。歷數百年。而淹速弘
治永祿。後天厭其熱。火熾激
熄。而昇平之化。遂敷。和漢之
學。二兼行焉。於是乎。立言之
士。濟。輩出。迺耳目所陶。鎔

心思工妙。其規模大段。既歸於自然。猶士大夫誇勢氣。文家談揣摩。故自長短歌詠。談諧而種之。文辭或以倣。搜神述異者。偶語傳奇。作者述志。隨手鈔寫。然願其為書。成卷帙。浩繁。

又撰推瑣切。至於今日。綜而論之。有文送汝。不可關。撰有起置。而不顧之集。互有攻訐。紛如。詠馬。老師。宿生。安。折衷也。尾崎雅嘉。夙負。執古之名。詩書頌。誥。班馬志。傳。稍闕。之比。壯通。

群書一覽 和書部序

念國學自古今。字母典誌至。
歌訣與秘昭晰。支分傳而無。
弊。近日類合其所見。刊奉活字。
寫冊。尋數萬書目。不拘雲過。
孰覈一。記注作者名。意予一。
覽之。乃恣適。不錯焉。吾間真好。

深思之士。每通一義。擲心竊。
樂之。不復敢待。索之後世子。雲。
也。自今以後。和學一流者。必就。
此集。得其書。攻其義。則禮樂。
名物。激言大意。至今昔事。變。
必。其。實。美。嗟乎。雅素之功。於。

是乎偉矣哉。

享和 新元 辛酉 攝月 穀旦

播州 奥田元繼

竹窓森世黃書

岸本東漢刀

群書一覽例言

一 此書に載るるの書目ハ予が二十年來渉獵するところの
 群書の中より鈔録するものにしてハ記憶するものなり今
 一の篇目大意等概しては精粗いしるるを以て
 著書のところよりいふれざる其餘も一
 けい寓目せし書も概おし出せしむ此の
 けい寓目せし書も概おし出せしむ此の
 けい寓目せし書も概おし出せしむ此の
 けい寓目せし書も概おし出せしむ此の
 一 此書二十四門よりなりとて其類の書を挙げて
 又人々を以て其部目とて流し流しに
 又人々を以て其部目とて流し流しに
 又人々を以て其部目とて流し流しに

日本紀ハ國史の部ニ收むといへども其第一第二の神代卷の末
書ハ神書の部ニ收め大和物語源氏物語等ハ其時物語の
部ニ收むといへども平家物語栄花物語等ハ其時の實録ナ
ルハ雜史の部ニ收むといふべし

一 此書ニ假字はうひの格ナラズ古書の大意を考へずハ
古假字と用ひ近代の書ニハ今假字を用ひしものナラズ
童蒙の尺ヤスといふハナリト云フニ魚下ニ俗通ニ
古書のものナラズ今傳ニハ今偽書ナリものナ
カラスナリハ何のナリト云フニ魚用ニ屬スといへ
一 其書ハ人ニ具眼の入りしニ其真偽を考へ

難しげきことなり此書體ハ古くもあつた
先輩の議論ハ舉ぐ蒙士ノ考へしハ其ものなり
遠境僻邑ノ人國學ニ志ハあつたニ書ナリしハ
多々抄録セリ書モノ再校ニ此一覽の中ニ收
メ借閱ニハ或ハ大部ニテ不日ニ業ヲ卒
日の上木ハ期すものなり

一 卷首は和書部とあり、漢土の書ノ部と嗣刻
 せんのごころあふゆかり
 一 予素より聞見博く、秘冊奥編のいふいふ
 ことなきは、いふもいと耳血き書ものあり
 せしむるいふのいふも、いふもかくも童蒙たお
 り思ひたせしむるいふも、大方の君子の浅陋を朝
 ことなきは、いふも
 享和元年冬至日
 浪華尾崎雅嘉識

群書一覽目錄

卷之一

國史類 一葉

六國史類、聚國史本朝通鑑、大日本史の類、其餘編

神書日類 四三葉

神道五部書十二部書、ト部家書、聖加の書、秋齋の

雅史類 二十七葉

二鑑、栄花物語、續世継保元平治物語、盛衰記、平家

卷之二

記録類 一葉

禮儀類典より諸家の記録百録鈔等に至る

有職類 十七葉 律令格式の書年中行事職原公卿補任ヒキカガ等

氏族類 五十九葉 萬多親王の姓氏録より人の傳元亨釋書作者部者部大系圖知譜拙記等に至る

字書類 七十七葉 倭名鈔新撰字鏡等より林逸リの節用集和爾雅東雅其餘和訓いろは假名遣の書等に至る

往来類 九十三葉 明衡往来新猿樂記より庭訓テ臂鷹コウ類聚等の往来に至る

法帖類 九十六葉 三國華海全書集古法帖耳比磨利帖其餘近來諸家藏刻の法帖等

卷之三

物語類 一葉 竹取ういほ濱松等の古物語より伊勢大和源氏袂衣今物語堤中納言等に至る

草子類 六十三葉 枕草子ほむぎ草等より舞の書に至る

日記類 七十六葉 紫式部和泉式部日記けう日記の類

和文類 八十一葉 扶桑拾葉集拾遺後葉等の目錄和文作例の書等を附す

記行類 九十七葉 土佐日記イサノ十六夜イサノ記等より近來諸家の道の記詞林意行集等に至る

卷之四

撰集類 一葉 萬葉集二十二代集新葉集等同註釋の書八代集抄傳抄頭注密葛の類

私撰類

四十七葉

新撰和歌集續詞花集雲葉集風葉集藤葉集

家集類

五十七葉

集等より古今新撰の六帖近代諸家の私撰集に至る
三十六人集より六家三玉の集其餘中古近代の

諸家集に至る

歌合類

十三葉

寛平歌合殿上根合六百番千五百番の歌合よ

り部類歌合職人盡歌合等に至る

百首類

九十九葉

定家卿の百人一首より百首部類其餘諸家の

百首に至る

千首類

百十三葉

為家卿の千首より千首部類乃至近代

の千首に至る

卷之五

類題類

一葉

勅撰類題新類題題林明題等の書

和歌雜類

十葉

和漢朗詠集家求和歌等より新古今竟寧和

歌厚慶抄等に至る

撰歌類

十七葉

二十六歌仙後歌仙新歌仙中古歌仙女房歌仙釋

門歌仙集外歌仙自贊歌等

歌學類

二十四葉

和歌四式八重御抄袋草子袖中抄藻鹽草歌林

撰歌の類より和歌教訓の書に至る
の書會式の書枕詞の書等に至る

詩文類

五十八葉

懷風藻經國集本朝文粹朝野群載菅家文

草等より萬里の帳中香四河入海惺窩羅山の文集日本詩

史等に至る

醫書類

七十二葉

本朝古代の醫書大同類聚方脈略抄頓醫抄

教訓類

八十三葉

萬安方其餘諸家珍藏の古写本等
安然和尚の童子教十訓抄熊澤了芥の孝經外

傳或同藤井懶齋の比賣鑑山崎闇齋の大和小学貝原篤信の俗訓の類

釋書類

九十葉

日本靈異記説法明眼論宝物集撰集抄等

管絃類

九十九葉

釋教題林 片岡山寺よ玉
催馬樂神樂 邦曲琵琶笛琴等

卷之六

地理類

一葉

諸國風土記の殘缺貝原篤信の筑前續風土記五

名所類

十九葉

畿内志の類より諸國の地志國説等に至る
諸國名所名亭歌集の類より勝地吐懷編今案

隨筆類

二十七葉

一條禪翁の東齋隨筆より榻鳴院筆河社鹽尻其餘諸家の雜話類に至る

雜書類

四十二葉

江談古事談古今著聞集の類 善隣國室記異稱日本傳 馭戎慨言の類 好古小録好古日録和漢硯譜の類

集古十種目錄 花押藪萬室全書 名物類聚の類 書籍目錄の類 農業全書 四季草 圓珠經 其餘雜書數十部

群書類從

百十葉

一千二百七十二種の書目あり

總計三十四門

群書一覽

群書一覽卷之一

國史類

本朝六國史

百七十卷

日本書紀 二十卷 續日本紀 四十卷 日本後紀 四十卷 或分三十卷
 今存十卷 寫本二十卷 續日本後紀 二十卷 文德實錄 十卷
 三代實錄 五十卷 以上六部皆和名之正史 稱之曰本朝六國史
 又云新國史 和名之正史 稱之曰本朝六國史
 日本書紀 二十卷 十五本

第一第二神代卷上下 天地開闢より 鸕鷀草葺不合尊
 十一年八月より 凡八人の代 九百六十二年の神代記
 ○此書八人皇四十四代元正天皇の養老四年より 一品舍人親友

群書一覽 和書部一

卷のせりあり巻首自序の次は山書の綱領にげく
山書は修すべしといふ舊説も概して全くと安麻呂
等のいふいふ書採者といふに似ておぼしきか
なれば海せらるる○山書中にも晋書に倭人自太伯の
謂らるる事ありて吾國君は時々の苗裔たりと太伯の
なるやと蓋附會してこれを知りては梅す北畠親房
神皇正統記といふ昔日中の三韓と同種なりといふ
の書は桓武の序代は校すといふ垂加と夫の
太伯のなるといふ國史より其徴なきことハハれを
言なり原の親房著る良しこれ知すといふ是れ
醍醐帝の序に釋圓月國史は修すといふ太伯の記は
ありてこれを禁止せしむるは林よか外通鑑といふ
らるる時と西らるるに如くは儒者ハ姬氏國の
キリキリといふやとすれを儒者ハ姬氏國の

の太伯の事附會し佛者ハ大日靈の名に託して大日如
來の事証人とす世人は此の事なきに流れて神聖の
統とすといふは○兼良公ハ博覧廣識の才ありて
神道ハ兩部習合の事なりといふは其の自序も蓋
古の事なるを言ふ青史といふ傳人ハ神靈ハ人ト
宣言す聖賢ハ軌と操りて紀載すニ教の證すとす
一書の証とすといふなり
日本書紀通證 二十五卷 谷川士清
古今諸家の説も概して佛者ハ大日靈の名に託して大日如
來の事証人とす世人は此の事なきに流れて神聖の
統とすといふは○兼良公ハ博覧廣識の才ありて
神道ハ兩部習合の事なりといふは其の自序も蓋
古の事なるを言ふ青史といふ傳人ハ神靈ハ人ト
宣言す聖賢ハ軌と操りて紀載すニ教の證すとす
一書の証とすといふなり
附録ニ篇 舍人親王傳 講國史等 第二卷より才七卷まで
神代紀 才ハ卷神武紀より才二十五卷持統紀といふ○山書の
本文ハ伊勢神宮の古本と先達の考といふにたれおと

群書一覽 和書部一

雙言校す...の才卷の彙言附録...
紀轉字の活字印...
号付...
のね...
の...
戌辰の年成...
実連御宝曆...
の...
日本書紀註 写本
三十一卷

作者...
りけ...
延喜式...
ホ...
重遠...
宗因...
垂加...
梅園氏...
光海...
時喜...
松雲...
桑方

桂翁書紀集解

十卷 河村秀乃根

書紀の文辞ハ古文辞ナリ或ハ内典ニ出ルハ外典ニ出ル
文茂記...
意...
又云此書日本の二字ヲ刪
書...
蓋中古の世...
傍...
轉字...

書の字は改めく日本の二字とありぬ字繫新くろけ非
あしづき長邦の書は唐夏商周の字は繫西漢以下これ
の國号はくもつりしめこれ書は定種なり矣興恒り世
の變革はるぬはせりその世は稱すはつて漢書晋書ホ
の号りたりやお例は用ゆつてしる故に今舊義よ
推しつるさなりしむ雲蝶はつてしるの古中ははく日中の
二子は刪ししむ○又しはし書紀法を備ししむ慶長の刺
本は八卷未だ慶長に支清系は國史の跋りし慶長十五
年洛河野子三白の跋あり按するは技師と傳ししるの人安久
二子は兼頼りしむ中はト部兼方りし永仁中ト部仲季は
又嘉元甲辰は沙弥蓮惠あり康永壬午は兼負りし永正中は
内大臣実隆公ありなりし内相公のむはつて捧し銀ありし
今世盛はのりしむろすかをらしむとて定めく系はつ
しむの脚の伝雲蝶ししむ人のむらりし雲蝶は勢州の初官

龍遊近の門人し寛延元年はま一幅の圖一卷の書は廣
て至りしむ此は小戸橋樞系の圖此は古本の書
紀樞要なりし雲蝶ありし和州はらりし石上の神ありし
農家宿すしは彼農父年七十餘ありし一麓は出するて
十四軸あり農父のいしむ家は舊くしむ傳ししむ
かゝりし何の傳ししむはありし今和州に寄附ししむ冥福
とありし雲蝶受くしむを披けしむ題ししむ書紀ししむ
意ししむしむはこれ怪ししむくしむ日本紀の布とあり
て参校するは間錯簡純謬りし故に要は括くしむを此
しむて以て一冊とす君古史を好むしむはありしむありて
これを示すしむはありしむ彼傳ししむの系は紙黄子書譜
膳写ししむはありしむ彼傳ししむの系は紙黄子書譜
好むしむはありしむを標ししむはありしむ菴中は藏す第一卷は
十二卷あり十三卷あり十四卷あり十八卷あり二十卷あり才二十卷あり

日本後紀

彼書の大抵と考つてしるは
日本後紀缺本 八卷

第五 第八 第十三 第十四 第十七 第二十 第二十二 第二十四
已上八本からなる。卷首は左大臣正二位兼行左近衛大将臣藤
原朝臣等奉勅撰し、いつて中近江都塙檢校の内人稻山行
教京師に於て撰らる。其の類聚國史日本紀畧
ホの諸書に以て校訂し、上木す今うた書帙に記す。其の
文は左に記す。日本後紀ハ六國史の一として、閑院贈相國冬嗣公
等勅撰の、撰らる。其の類聚國史日本紀畧
て世に傳へたる。其の類聚國史日本紀畧
諸書に就て、其の類聚國史日本紀畧
後紀ハ、其の類聚國史日本紀畧
後紀の、其の類聚國史日本紀畧
其の類聚國史日本紀畧

日本逸史 四十卷 鴨祐之
六國史中より日本後紀の一書に、其の類聚國史日本紀畧
卷之五 延暦十五年七月、起り十六年三月、盡
卷之八 延暦十八年正月、起り十二月、盡
卷之十三 延暦二十四年七月、起り大同元年五月、盡
卷之十四 大同元年六月、起り八年九月、盡
卷之十七 大同二年四月、起り四年四月、盡
卷之二十 弘仁元年九月、起り十二月、盡
卷之廿二 弘仁二年正月、起り四月、盡
卷之廿四 弘仁五年七月、起り六年十二月、盡
此中寛政十二年塙檢校の家、刻す

和書部一

失くせし付りし後四位上鴨祐之縣主の日記
 年代のよもれ菅公の類聚國史の散見ししもの
 之と欲すれども類聚國史も令部のもの
 下りたるは残缺なるもの付りしもの
 舊史の亡るは類聚國史若干巻を付りし又慨然
 本紀今義解新撰姓氏録等の諸書に條附しし四十巻
 附す考及今今迄史の序令及世卷末考及一巻に
 格式姓氏録と御補任日記紀畧等の諸書に考及りし
 是の同らうありしハ漢字衍文等ししもの

和書部

十二

のしつれ考ししもの

第一卷 桓武天皇の延暦十一年より

才十四巻 日二十

第二卷 平城天皇の大同二年より

才十七巻 日四

第三卷 嵯峨天皇の弘仁元年より

才二十一巻 日十四

第四卷 淳和天皇の天長元年より

才四十巻 日十

第五卷 元禄壬申より

才保九年 日

續 日本後紀

二十巻

太政大臣位一位右京良房参議四位下式部大輔春澄朝臣
 德等勅命奉^レ撰^レ清和天皇の御紀十一卷
 天皇所一代の實録^レ天長十年二月より
 月より凡十八年の間の御記せり

和書部

良房忠仁公の序あり今の刊中の野春節の如し寛文八年十月春節の序あり

文德實録

十卷

此書文德天皇一代の實録一嘉祥三年三月より天安三年八月より凡九卷の如し陽成院の元慶二年十二月右大臣三位左大臣良房の序あり其基経公等奏上せりとのり書ハ都の良香菅公等編集せり史なり文德天皇ハ嵯峨天皇の孫仁明天皇の孫なり○此基経公の序實ハ菅公の序也一菅家文章卷之七日本文德天皇實録奉家君教所製也一載せられたる是善の命なり其序公の代りたり○平維章云文德實録今の刊本誤字脱文多し一才二卷は二百餘字の脱文あり未巻天皇崩御のふは天白王一代の盛徳ありけり此序は春秋世有にかくれと云やうふは世に字の字の誤り一春秋ハ天皇

乃序多れり其を廿有二の如し一宝永六年三月刊行す

三代實録

五十卷 二十本

清和陽成光孝三代の實録なり天安二年八月より仁和二年八月より凡二十の如し其序あり大外記大藏善行の撰り醍醐天皇の延喜元年八月成り巻首は日本三代實録と題せり○序中原朝臣時平の序あり右大臣兼行右近衛大将菅原朝臣道真後五位上行勘解由次官兼大外記参河権介大藏朝臣善行大外記六位上三統宿祿理平等の撰り菅公の撰り編修ありありたまたま西府は謫せり是れは成りなり序やよる今刊本ハ松下見林教中あり校正其餘類取衣國史及諸書は澄りしと補ひる

撰りて成りし一和訓抄所々上本す々々寛文十三年の
跋りてしる

古事記 三卷

四十二代元明天皇の和銅五年大の安万侶詔於奉了神代よ
り人皇と十四代推古天皇の御世の御記せし或は
古の記を大守麻侶一人の纂修し日本紀の安万侶も史
臣の中列せし舎人親王に徳裁しり一日中
紀し古の記を文法脈絡大に考へしり序に和銅
四年九月十八日臣安万侶の詔しり禊田の阿礼り誦す
こらた勅語舊辭を以て載上せしり或は大抵記すしり
ハ天地開闢よりしり小治田の御世に記し故に大の御中
の御記以下日子波限建鷲草葺不合尊以前の上巻と
神代伊波礼毗古天皇以下品陀の御世以前の中巻と大
薙皇帝以下小治田大宮以前の中巻とす々々賀茂真例

祝詞解の附記より古史記の古事記は先し日本紀を次
し日本紀は上古の教書御選定せしり儒士紀の御
清人ものしり漢文の流しり且國語を
とて古事記は上古實直の國史なり且國語を
とて古事記は上古實直の國史なり且國語を
とて古事記は上古實直の國史なり且國語を

古事記傳 十八卷 本居宣長

此書既、擇りしり十七卷の中、卷首は徳滿りり
古記の御記しり小治田の御世に御記しり天皇の御世二十
八代は聖德太子獲我馬子大君も天皇記及國記臣
連伴造國造百八十部并土民赤の御記しり
系の御記しり大の御代十代は川島も御記しり
ら御記しり帝紀及上古諸事御記定しりめたりり

ねんしすてふ合纂古事記に徳久家記の序に紀
偽撰考著せり。○真淵曰舊の紀偽をいひ今も
百餘のあれ他をいひぬ。○宣長曰世の書に紀
の古にうゝれり人の偽を輯めしもの。○
太子命の撰ひたり。○
とらふまは遠く集めたり。○
記の古にうゝれり人の偽を輯めしもの。○
太子命の撰ひたり。○

教電頭舊事記

十卷 五本

出に近世校ふのかし。○
ていふ。○
及び其他の古事記の
て家藏す。○

教電頭古事記

三卷

り人の記。○
を故家より。○
なし。○
二月。○
の古事記。○

舊事紀偽撰考

多田義俊

序に誦先代之舊辭。○
記の段に先代舊事本紀。○
のせしむ。○

の下の四の紀十卷あり、八の二十卷あり、中の依擬...
此書舊事紀の依擬... 明證十箇條... 上...
奉... 兵部源義俊書... あり

三紀辨

一卷 同上

日本紀舊事紀古事記... 各記... 依擬...
先代舊事本紀 一名大成經 七十二卷 七十四本

或ハ前代舊事本紀... 又先代舊事大成經... 号す○此書...
美濃國黑瀧の潮音和尚... 依擬...
了... 正部二十八卷 副部二十四卷... 依擬...
聖徳太子... 依擬...
露... 心部四十卷... 依擬...
刻板... 依擬...
此中... 二十九卷 宗徳經... 四十卷 神教經

の二冊延宝年中の別刻あり、此神教經... 秦河勝の序...
依擬... 今全中の目錄... 依擬...
大成經陰陽本紀目錄一卷

卷第一	神代本紀	卷第二	先天本紀
卷第三	陰陽本紀	卷第四	黄泉本紀
卷第五	神祇本紀上	卷第六	神祇本紀下
卷第七	神事本紀上	卷第八	神事本紀下
卷第九	天神本紀上	卷第十	天神本紀下
卷第十一	地祇本紀上	卷第十二	地祇本紀下
卷第十三	皇孫本紀上	卷第十四	皇孫本紀下
卷第十五	天孫本紀上	卷第十六	天孫本紀下
卷第十七	神皇本紀上之上	卷第十八	神皇本紀上之下
卷第十九	神皇本紀中之上	卷第二十	神皇本紀中之下
卷第二十一	神皇本紀下之上	卷第二十二	神皇本紀下之下

新書一覽

十一

卷第二十三	天皇本紀上之上	卷第二十四	天皇本紀上之下
卷第二十五	天皇本紀中之上	卷第二十六	天皇本紀中之下
卷第二十七	天皇本紀下之上	卷第二十八	天皇本紀下之下
卷第二十九	天皇本紀上之上	卷第三十	天皇本紀上之下
卷第三十一	天皇本紀中之上	卷第三十二	天皇本紀中之下
卷第三十三	天皇本紀下之上	卷第三十四	天皇本紀下之下
卷第三十五	聖皇本紀上之上	卷第三十六	聖皇本紀上之下
卷第三十七	聖皇本紀下之上	卷第三十八	聖皇本紀下之下

已上四十卷山部

卷第三十九	經教本紀上之上	宗德經
卷第四十	經教本紀上之下	神教經
卷第四十一	經教本紀中之上	神文傳
卷第四十二	經教本紀中之下	三章
卷第四十三	經教本紀下之上	鮮詠

卷第四十四	經教本紀下之下	奉謚	
卷第四十五	祝言本紀	卷第四十六	天政本紀
卷第四十七	大占本紀上	卷第四十八	大占本紀下
卷第四十九	曆道本紀上之上	卷第五十	曆道本紀上之下
卷第五十一	曆道本紀下之上	卷第五十二	曆道本紀下之下
卷第五十三	醫綱本紀上之上	卷第五十四	醫綱本紀上之下
卷第五十五	醫綱本紀下之上	卷第五十二	醫綱本紀下之下
卷第五十七	禮綱本紀上之上	卷第五十八	禮綱本紀上之下
卷第五十九	禮綱本紀下之上	卷第六十	禮綱本紀下之下
卷第六十一	詠歌本紀上	卷第六十二	詠歌本紀下
卷第六十三	御語本紀上之上	卷第六十四	御語本紀上之下
卷第六十五	御語本紀下之上	卷第六十六	御語本紀下之下
卷第六十七	軍旅本紀上	卷第六十八	軍旅本紀下
卷第六十九	未然本紀	卷第七十	憲法本紀

群書一覽

和書部一

二十

ていしん 伊勢國司組北畠准后大納言正二位一品准大臣南朝の詔... 著書四部元集扶桑略記神皇正統記職原抄... 今案ずるに近世扶桑略記の残篇と稱す... 又日本紀略と稱す... 醍醐天皇の御記... 記のち程房の略記混雑す... 伊勢國司組北畠准后大納言正二位一品准大臣南朝の詔... 著書四部元集扶桑略記神皇正統記職原抄... 今案ずるに近世扶桑略記の残篇と稱す... 又日本紀略と稱す... 醍醐天皇の御記... 記のち程房の略記混雑す...

扶桑略記 十四卷

今井似爾萬葉緯... 阿闍梨皇圓抄... 伊勢兵乱記系譜... 親房村上天白王... 十代伊勢國司組北畠准后大納言正二位一品准大臣南朝の詔... 著書四部元集扶桑略記神皇正統記職原抄... 今案ずるに近世扶桑略記の残篇と稱す... 又日本紀略と稱す... 醍醐天皇の御記... 記のち程房の略記混雑す... 伊勢國司組北畠准后大納言正二位一品准大臣南朝の詔... 著書四部元集扶桑略記神皇正統記職原抄... 今案ずるに近世扶桑略記の残篇と稱す... 又日本紀略と稱す... 醍醐天皇の御記... 記のち程房の略記混雑す...

加東減はれ文... 拾要... 比叡山切依... 醍醐天皇... 卷之二 醍醐天皇下... 卷之三 朱雀天皇... 延長元年... 天慶九年... 此中承平五年闕

卷之四 村上天皇上 天曆元年より二年より

卷之五 村上天皇中 天慶九年より天曆九年より至る三年

卷之六 村上天皇下 天曆十年より康保四年より

卷之七 冷泉天皇 康保四年より安和二年より至る

卷之八 一条天皇上 安和二年より永觀二年より至る

卷之九 一条天皇下 永觀三年より寛和二年より至る

卷之十 後冷泉天皇 寛和二年より寛弘三年より

卷之十一 後三条天皇 寛弘三年より長徳元年より至る

卷之十二 白河天皇 寛徳元年より寛治八年より至る

卷之十三 高倉天皇 寛治八年より寛治九年より

卷之十四 後鳥羽天皇 寛治九年より建久二年より

卷之十五 後鳥羽天皇 建久二年より元暦元年より

卷之十六 後鳥羽天皇 元暦元年より建久二年より

卷之十七 後鳥羽天皇 建久二年より元暦元年より

卷之十八 後鳥羽天皇 元暦元年より建久二年より

卷之十九 後鳥羽天皇 建久二年より元暦元年より

卷之二十 後鳥羽天皇 元暦元年より建久二年より

卷之二十一 後鳥羽天皇 建久二年より元暦元年より

卷之二十二 後鳥羽天皇 元暦元年より建久二年より

卷之二十三 後鳥羽天皇 建久二年より元暦元年より

卷之二十四 後鳥羽天皇 元暦元年より建久二年より

卷之二十五 後鳥羽天皇 建久二年より元暦元年より

卷之二十六 後鳥羽天皇 元暦元年より建久二年より

卷之二十七 後鳥羽天皇 建久二年より元暦元年より

卷之二十八 後鳥羽天皇 元暦元年より建久二年より

卷之二十九 後鳥羽天皇 建久二年より元暦元年より

卷之三十 後鳥羽天皇 元暦元年より建久二年より

卷之三十一 高倉天皇 寛治九年より寛治十年より

卷之三十二 高倉天皇 寛治十年より寛治十一年より

卷之三十三 高倉天皇 寛治十一年より寛治十二年より

卷之三十四 高倉天皇 寛治十二年より寛治十三年より

卷之三十五 高倉天皇 寛治十三年より寛治十四年より

○按ずる此書より川とてこれ書ハ 尊意座主傳 或記 御記
 淨藏傳 将門誅害日記 道賢上人冥途記 天滿天神託宣記
 慶氏往生記 宝篋印私記 穴穂寺縁起 年代曆 往生傳
 供養記 齋然法橋渡唐牒 託宣畧抄 奥州合戦記 西寺驗記
 官使実録記ホカリ此餘孔久表文等凡々あり

日本紀略 写本 十一卷

群書一覽 和書部一

二十一

率合附會かゝのこゝろでもあつてもその理りも何れも夫天孫談の
若所謂天神の子たりと何ん畿邦を降らすと西都藪爾の僻
地を来りや何れ早く中州の善國を都せむと瑣々梓木に出見
麴草乃三世日向は君とて神武四十五歳東征し安藝
國に至り明年吉備國に下りて三年に於て舟楫修め舟食を聚
め其後河内國に至り長髓彦と大は孔舎衛坂に下りて
支こしを獲りて遂に長髓彦を殺し大和國に入禮祭の儀と
し且夫神武の雄略を以てくろの難をくろかた下りて何れや天孫
の大己貴神武の長髓彦たり或は相拒きたりは相戦ふこれと
懼むべし想ふに其大己貴長髓彦は我邦古昔の酋長なりと神武
の代りて之の鳴呼姫氏の孫子本支百世萬世に至りて君たり
亦盛なりと云彼強大の呉ハ越ハ滅びては我邦の室
祚天地にまじりて余りては我邦の室
信す設使圓月復生しとも余言何れんやと云る昔書

載日本八蓋夏后少康の裔カラス梅すは少康の庶子會稽に封
せし身は文け髪を湖江淮の彼に處て龍鼉更鼉伍とな
遂に越の國に下りてこれ觀望と云越も我邦の地
一葦の抗に往來の易なり以て太伯の子孫とわたり少康の後昆
すこれすは子孫推して太伯とて夏后と云は
るは子孫推して太伯とて夏后と云は
り我國固有の神皇と敬せん人不可なりと云日足亦然也と
本朝通鑑提要 三十卷
神武天皇より後陽成天皇の慶長十五年に至る卷末に曰右提要二十
卷ハ男勳門生野節坂亭とて本書に援く繁き河省と云を
提し編と云はる易覽に便すとのかりり一寛文十年庚
戌の夏弘文院學士林恕
國史寶錄 写本 七十九卷
此書七十八卷序目錄一卷初合せ七十九卷とすの卷首は天神七代

群書一覽

和書部

二十五

傳馬遷の書五堅蔚宗以下の作校奉す...
 夫本朝を睦ま天七地五の代へ置る論セ
 ず履中天皇よりあく國史を置るより以來豐聰の紀阿禮之請
 舎人の書相結く作るれ本朝の史かき菅野真道の續紀と撰
 ず藤原緒嗣の後紀と撰す文徳の起り淳和の起り仁明の事と記
 すもの良房かき文徳の起り河記すもの基經かき二代実録ハ
 時平の撰すもの宇多の起り仁史の撰すもの七百有餘
 歳正保年中我祖祖羅山先生公命を受く本朝の史を撰すハ
 編終す故有く止寛文年中我祖鶴峰先生又公命を
 受く前編すもの書の補す名を賜す本朝通鑑より舎
 人の書紀より以下近代の事に至るまで坦然と明白なり本朝の
 史を補すもの既成の後我祖より國史實録を撰すものより
 止家君これ補す漸く堆積なり業々編むがごとく以て
 七十卷より去年の林鐘より今茲の大簇に至る今其編を終る

たゞ一且門生一兩輩に相代りてこれを書せし既成の
 後其一本はそれら以て大兄賜ひ其一本は則て小子に授けし
 子側侍りて本朝事跡の大略を知りて得てこの幸なり且此
 書はたゞこの幸の又幸かき以て僅かなる蔵めく聊千金の言なり
 悦びしなり元禄十六祀昭陽協怡建宣之月確軒林志書
 第一卷 元九百七十年 神武天皇の甲寅五十四年、起り
 懿徳孝昭孝安孝靈孝元開化崇神垂仁景行成務仲哀神功の教朝
 以歴く應神天皇の壬申四十二年、盡
 第二卷 九百九十四年 仁徳天皇の癸酉元年、起り履中及正
 元恭康安雄略清寧顯宗仁賢の教朝以歴く武烈天皇の丙戌
 八年、盡
 第三卷 九百四十年 武烈天皇の丁亥九年、起り
 宣化欽明敏達用明崇峻の教朝以歴く推古天皇の戊子三十六年
 小盡

和書二部

第四卷 九三十二年 舒明天皇の己丑元年、起り皇極孝徳の

朝何歴く齊明天皇の辛酉七年、盡

第五卷 九三十六年 天智天皇の壬戌元年、起り持統天皇の

丁酉十二年、盡

第六卷 九三十八年 文武天皇の戊戌二年、起り元明の朝と歴

く元明天皇の甲子神亀元年、盡

第七卷 九三十五年 聖武天皇のし丑神龜二年、起り己丑天

平勝宝元年、盡

第八卷 九三十二年 孝謙天皇の庚寅天平勝宝二年、起り慶

帝の朝何歴く稱徳天皇の庚戌宝龜元年、盡

第九卷 九三十二年 光仁天皇の辛亥宝龜二年、起り辛酉天

應元年、盡

第十卷 九三十八年 桓武天皇の壬戌延暦元年、起り平城天

皇の己丑大同四年、盡

第十一卷 九三十四年 嵯峨天皇の庚寅弘仁元年、起り淳和天

皇の癸丑天長十年、盡

第十二卷 九三十五年 仁明天皇の甲寅承和元年、起り文徳天

皇の戊寅天安二年、盡

第十三卷 九三十九年 清和天皇の壬午貞觀元年、起り陽成の

朝何歴く光孝天皇の丁未仁和二年、盡

第十四卷 九百二十四年 宇多天皇の戊申仁和四年、起

り醍醐朱雀村上冷泉圓融花山の教朝と歴く一條天皇の辛亥寶龜

八年、盡

第十九卷 九三十五年 三條天皇の壬子長和元年、起り後一條

天皇の丙子長元九年、盡

第二十卷 九三十二年 後朱雀天皇の丁丑長曆元年、起り後冷泉

天皇の戊申治曆四年、盡

第二十一卷 九三十九年 後三條天皇の己酉延久元年、起り堀河天皇

和書二部

和書二部

三十八

の丁亥嘉承二年の盡

第二十二卷 凡三十四年

白王の辛酉永治元年の盡

第二十三卷 凡十四年

壽永二年の盡

第二十四卷 凡三年

正平の盡

第二十五卷 凡十年

の戊子仁安三年の盡

第二十六卷 凡十一年

承二年の盡

第二十七卷 凡二年

白王の庚子治承四年の盡

第二十八卷 凡二年

鳥羽天皇の戊子天仁元年の起り崇徳天

近衛天皇の壬戌康治元年の起り

後白河天皇の丁丑保元三年の起り

二條天皇の己卯平治元年の起り

高倉天皇の己丑嘉應元年の起り

高倉天皇の己丑嘉應元年の起り

高倉天皇の己丑治承三年の起り

安徳天皇の辛丑養和元年の起り

壽永二年の盡

第二十九卷 凡二年

治元年の盡

第三十卷 凡四年

西五年の盡

第三十一卷 凡九年

午九年の盡

第三十二卷 凡十二年

承元四年の盡

第三十三卷 凡十一年

己承久二年の盡

第三十四卷 凡十一年

貞永元年の盡

第三十五卷 凡十四年

後鳥羽天皇甲辰元暦元年の起り

後鳥羽天皇乃丙午文治二年の起り

後鳥羽天皇の庚戌建久元年の起り

土御門天皇の己未治元年の起り

順徳天皇の辛未建暦元年の起り

後堀河天皇の壬午貞應元年の起り

四條天皇の癸巳天福元年の起り

皇の丙午寛元四年の盡

三十一

第二十六卷 凡二十八年

後深草天皇の丁未宝治元年の起り龜山

天皇の甲戌文永十一年の盡

第二十七卷 凡二十七年

後宇多天皇の乙亥建治元年の起り伏見

天皇の朝政歴く後伏見天皇乃辛丑正安二年の盡

第二十八卷 凡二十七年

後二條天皇の壬寅乾元二年の起り花園

天皇の戊午文保二年の盡

第二十九卷 凡二十二年

後醍醐天皇の己未元應元年の起り享長

元弘元年の盡

第四十卷 凡二年

後醍醐天皇の壬申元弘二年の起り癸酉

三年閏二月の盡 光嚴天皇附

第四十一卷 凡一年

後醍醐天皇の癸酉元弘三年二月の起り

十二月の盡 光嚴天皇附

第四十二卷 凡二年

後醍醐天皇の庚戌建武元年の起り乙

亥二年の盡

第四十三卷 凡一年

後醍醐天皇の乙亥建武二年の起り丙子

延元二年の盡

第四十四卷 凡三年

後醍醐天皇の丁丑延元二年の起り己卯四

年の盡 光明天皇附

第四十五卷 凡九年

光明天皇の庚辰曆應二年の起り戊子

貞和四年の盡 南朝後村上天皇附

第四十六卷 凡二年

崇光天皇の己丑貞和五年の起り辛卯

觀應二年の盡 南朝後村上天皇附

第四十七卷 凡十七年

後光嚴天皇の壬辰文和元年の起り戊申

應安元年の盡 南朝後村上天皇附

第四十八卷 凡二年

後光嚴天皇の己酉應安二年の起り辛

亥四年の盡 南朝長慶院附

第四十九卷 凡二年

後圓融天皇の壬子應安五年の起り甲

群書一覽 和書部一

三十一

寅七年の盡 南朝長慶院附

第五十卷 凡八年 後圓融天皇のし卯永和元年の起己壬

戌永徳二年の盡 南朝後龜山院附

第五十一卷 凡十二年 後小松天皇の癸亥永徳二年の起己酉

明徳四年の盡 南朝後龜山院附

第五十二卷 凡二十五年 後小松天皇の甲戌應永元年の起己酉

老^多天皇の戊申長元元年の盡

第五十三卷 凡二十六年 後花園天皇の己酉永亨元年の起己甲申

寛弘五年の盡

第五十四卷 凡四年 後土御門天皇の乙酉寛弘六年の起己戌子

應仁二年の盡

第五十五卷 凡二十年 後土御門天皇の己丑文明元年の起己戌申

長亨二年の盡

第五十六卷 凡十二年 後土御門天皇の己酉延徳元年の起己

庚申明應九年の盡

第五十七卷 凡二十六年 後柏原^{ツカハシ}天皇の辛酉文龜元年の起己丙戌

天永六年の盡

第五十八卷 凡二十年 後奈良天皇の丁亥天永七年の起己丙

午天文十五年の盡

第五十九卷 凡八年 後奈良天皇の丁未天文十六年の起己

甲寅二十三年の盡

第六十卷 凡三年 後奈良天皇のし卯弘治元年の起己

丁巳三年の盡

第六十一卷 凡四年 後親町^{オヤチノ}天皇の戊午永禄元年の起己辛

酉四年の盡

第六十二卷 凡五年 後親町天皇の壬戌永禄五年の起己丙

寅九年の盡

第六十三卷 凡三年 後親町天皇の丁卯永禄十年の起己巳

十二年 小盡

第六十四卷 凡二年

正親町天皇の庚午元龜元年 起り壬申二年 小盡

第六十五卷 凡二年

正親町天皇の癸酉天正元年 起りし亥二年 小盡

第六十六卷 凡五年

正親町天皇の丙子天正四年 起り庚辰八年 小盡

第六十七卷 凡二年

正親町天皇の辛巳天正九年 小盡 起り壬午十年 小盡

第六十八卷 凡二年

正親町天皇の癸未天正十六年 小盡 起り甲申十二年 小盡

第六十九卷 凡二年

正親町天皇のし酉天正二十二年 小盡 起り

第七十卷 凡五年

後陽成天皇の丁亥天正二十五年 小盡 起り

辛卯十九年 小盡

第七十一卷 凡二年

後陽成天皇の壬辰文祿元年 小盡 起り

第七十二卷 凡三年

後陽成天皇の癸巳文祿二年五月 小盡 起り

第七十三卷 凡三年

後陽成天皇の丙申慶長元年 小盡 起り

第七十四卷 凡二年

後陽成天皇の戊戌慶長二年 小盡 起り

第七十五卷 凡一年

後陽成天皇の庚子慶長五年 正月 小盡 起り

第七十六卷 凡一年

後陽成天皇の庚子慶長五年九月 小盡 起り

第七十七卷 凡四年

後陽成天皇の辛丑慶長六年 小盡 起り

群書一覽

三十五

舊事本紀	先代舊事本紀	古事記	日本書紀
續日本紀	日本後紀	日本後紀纂	續日本後紀
文德實錄	之代實錄	類聚國史	新國史
官吏記	杖乘略記	日本紀略	神皇正統記
續神皇正統記	歷代皇王紀	一代要記	本朝世紀
愚管抄	百鍊抄	毘沙門堂所藏記	帝王紀抄
帝王編年記	本朝編年錄	皇年代畧紀	皇代畧記
皇代記	年代記	畧年代記	鳩嶺年代記
年代殘篇	編年殘編	大乗院年代記	如是院年代記
和漢合符	和漢合運曆	和漢合運	天地根元歷代圖
二中歷	水鏡	大鏡	大鏡裏書
今鏡	增鏡	世繼物語	榮華物語
康平記	將門記	陸奥軍記	陸奥話記
奥羽軍記	奥州後三年記	五代帝王物語	東鑑

東鑑脫露	東鑑補遺	保元物語	平治物語
平家物語	平家物語劔卷	源平盛衰記	承久記
保曆間記	太平記	難太平記	梅松論
花營之代記	元弘日記裏書	永亨記	閑城書
閑城書裏書	吉野事書案	船上錄	伯耆卷
足利治亂記	室町日記	明德記	應永記
豫章記	櫻雲記	延喜御記	天曆御記
李部王記	貞信公記	天慶二年記	九曆
小右記	權記	道長記	左經記
水左記	春記	小一條院記	師實記
師實家記	經信記	匡房記	後二條閑白記
中右記	長秋記	永久二年外記	大府記
永昌記	忠通記	師遠記	宇槐記
兵範記	台記	台記別記	宇槐雜抄

群書一覽

和書部一

三十五

天書	親長記	實躬記	雅吉記	門乘記	山丞記	賴平記	白襲記	仁部記	平戶記	大外記中原師光記	殿記	吉記	三槐記
古語拾遺	大外記康富記	園大曆	實泰記	伏見院御記	經慶記	經信記	實基記	吉續記	深心院園白記	猪鬣園白記	三長記	吉記別記	顯廣王記
鎮座本紀	和長記	資益王記	成恩寺園白記	萬一記	信盛記	番記	後中記	後深心院園白記	後愚昧記	玉葉	自曆記	仲實王記	玉海
鎮座傳記	應永十三年曆裏書	業頭王記	薩戒記	花園院御記	經長記	編記	重長記	管見記	同別記	岡屋園白記	業資王記	明月記	愚昧記

二所皇大神宮例文	諸神根源抄	釋日本紀	二荒山記	寺社雜事記	石清水八幡緣起	石清水田祿記	北野緣起	律	延喜式	法曹類林	貢銀記	北山抄
大神宮延曆儀式	神代奧義秘抄	日本紀纂要疏	松浦社本緣	日吉神輿入洛記	鳩嶺官事抄	石清水善法寺文書	荏柄緣起	令義解	內裏式	法曹至要抄	宗金記	江家次第
字佐託宣集	神祇記	一宮記	丹生明神記	春日神不入洛記	鳩嶺雜錄	賀茂注進雜記	聖廟記	令集解	儀式	官曹事類	柱下類林	年中行事
寶基本紀	諸神記	日本紀私記	熟田社緣起	二十二社本緣	八幡愚童訓	鳩嶺雜事記	巖島詣記	名法要集	類聚三代格	新儀式	政事要略	西宮記
											禁秘抄	

群書一覽

和書部一

三十一

公事根源	恒例公事	行類抄	除目大成抄
朔旦冬至記	後二條帝即位記	崇徳院即位記	文應皇帝外記
正安御即位記	元弘元年劔差渡御記	行幸部類記	宸筆代記
宸筆御八講記	天祚礼祀職掌録	立坊次第記	院号定部記
讓位部類	伊勢奉幣雜例	伊勢公卿勅使例	弘安記
日吉叡山行幸記	書字山行幸記	北山行幸記	革命勘文
改元鳥免記	改元部類	職原抄	扶桑抄
四條院御葬礼記	龜山院御葬礼記	伏見院御中院記	後小松院升遐記
鹿苑院御葬礼記	雅縁悼義滿詞	攝関次第	公卿補任
職事補任	辨官補任	藏人補任	補宣補任
吉部秘訓抄	元秘別録	庭槐抄	拓植記抄
建武式目	新加制式	懷風藻	凌雲集
經國集	文華秀麗	魚題詩	都氏文集
田氏文集	菅家文章	菅家後草	本朝文粹

續本朝文粹	本朝麗藻	扶桑集	朝野群載
基俊朗詠集	性靈集	玉造不町壯表書	賀表部類
表白集	梅城録	桂林遺芳	雜言奉和
清水寺願文	萬葉集	古今和歌集	古今集頭注卷勘
古今集抄	後撰和歌集	拾遺和歌集	後拾遺和歌集
千載和歌集	新古今和歌集	新勅撰和歌集	玉葉和歌集
新拾遺和歌集	新撰古今和歌集	新葉和歌集	伊勢物語
真名伊勢物語	伊勢物語疑抄	伊勢家集	大和物語
土佐日記	紫式部日記	清少納言枕草子	赤染衛門集
和泉式部日記	辨内侍日記	長能集	清輔袋草子
清輔尚齒會記	清輔奥義抄	頭昭陳狀	俊成家集
俊成魚名抄	長明魚名抄	八雲御抄	後鳥羽院口傳
中殿御會部類記	晴御會部類記	南朝五百番歌合	河海抄
花鳥餘情	井蛙抄	三五記	鴨長明發心抄

群書一覽

和書部一

三十一

西行物語	撰集抄	山家集	後龜山帝和歌題辭
李花集	嘉喜門院集	草菴集	愚向賢注
仙源抄	和秘抄	和歌秘傳抄	私語抄
三代集	徹書記物語	清嚴茶話	兼載雜談
和歌不審	歌枕	東常綠圖書	作者部類
勅撰次第	古今集目錄	古今聽傳記	催馬樂秘抄
續教訓抄	體源抄	新撰姓氏錄	神皇系圖
皇胤紹運錄	紹運要略	皇帝系圖	帝王系圖
皇胤系圖	椿葉記	延喜本系	後醍醐院系圖
尊卑分脈	勸修寺系圖	冷泉系圖	物部系圖
大江系圖	藤原系圖	源氏系圖	菅原系圖
豐原系圖	紀氏系圖	橘氏系圖	清原系圖
中原系圖	和氣系圖	丹波系圖	坂上系圖
平氏系圖	大中臣系圖	吉田系圖	卜部系圖

楠氏系圖	名和系圖	兒島系圖	北島系圖
足利系圖	喜連川系圖	結城系圖	赤松系圖
石野系圖	足助系圖	舟木系圖	宇都宮系圖
菊池系圖	由良系圖	鳥居系圖	有馬系圖
佐々木系圖	北條系圖	相馬系圖	津守系圖
二階堂系圖	大館系圖	細川系圖	上杉系圖
今川系圖	高階系圖	小笠原系圖	石橋系圖
山名系圖	梶川系圖	千葉系圖	斯波系圖
畠山系圖	古河系圖	武田系圖	越智系圖
秋月系圖	丹治系圖	小野系圖	廣峰系圖
色川系圖	拓植系圖	吉見系圖	足利家譜
足利判鑑	大内家譜	細川家譜	上杉家譜
小笠原家譜	今川家譜	名和家譜	大多和家譜
井伊家譜	河野家譜	少貳家譜	結城家譜

和書部一

北條家譜	紀氏家譜	土岐家譜	島津家譜
織田家譜	結城文書	野上文書	河野文書
關岡家始末	土岐圖書	名和傳譜	菊池武將申狀
諸家大系圖	鎌記將系	關東評定傳	將軍執權次芽
鎌倉書牒	若州守護次芽	若州今富領主次芽	尺素往來
多田院文書	謚号雜記	寬平御遺誠	後伏見帝御書
後醍醐帝賜名和長年宸翰		後醍醐帝賜高野山詔書	
東大寺尊勝院所藏勅書		藥丸氏所藏繪旨	醍醐寺所藏勅書
禁綱代官符	筑紫風土記	肥前風土記	類聚倭名鈔
江談抄	濫觴抄	古事談	續古事談
十訓抄	古今著聞集	今昔物語	宇治拾遺物語
室物集	沙石集	長明方丈記	吉野拾遺
細川賴之物語	文祿清談	落書靈顯	嵯峨野物語
徒然草	日本長曆	源通冬願文	三善賢連高野山寄進狀

懺囊抄	最要抄	濫觴錄	初例抄
三國傳記	建武二年二年記	東齋隨筆	今川狀
少室原貞宗目書抄	鞠譜	雲井春	仁和寺書目錄
同外錄	拾芥抄	曾我物語	根元曾我
上宮記	聖德太子傳	太子傳畧	太子傳補闕記
上宮法皇帝記	柿本人丸傳	藤原百川傳	和氣清麻呂傳
田邑傳記	藤原基經家傳	藤原保則傳	恒貞親王傳殘編
女院小傳	後宮略傳	貴女抄	後宮抄
齋宮抄	齋宮考	齋院記	齋宮齋院記
作者部類	統三代作者部類	三十六人歌仙傳	新葉集作者考
弘法行狀要集抄	弘法行狀記	弘法行狀纂要抄	淨藏法師傳
明惠傳	黑谷上人傳	恒貞親王傳	恒性法親王傳
元亨釋書	鑑真東征傳	日本高僧傳	高僧傳要文抄
往生傳	續往生傳	拾遺往生傳	後拾遺往生傳

往生極樂記	常樂記	四天王寺手印記	叡岳夢記
延曆寺供養記	中堂供養記	中堂勘文	多武峰緣起
談峰畧記	仁和寺諸院家傳	仁和寺御傳	仁和寺諸堂記
仁和寺諸記抄	西院熊野御詣記	祈雨日記	釋家官班記
護持僧次第	東寺長者補任	東寺雜抄	祈雨御詠經記
請雨經法記	僧官補任	僧綱補任	東寺過去帳
東寺修行日記	孔雀經御修法記	五壇法畧記抄	同裏書
御受戒記	東大寺要略	醍醐寺座主次第	東大寺要錄
醍醐雜抄	醍醐報恩寺文書	寺社雜事記	醍醐雜事記
毘沙門堂記	大乗院文保三年記	勝尾山流記	吉水院文書
祇園修行日記	金剛峰寺取藏書	勸修寺諸記拔萃	光明寺藏書殘編
河州通宝寺文書	美濃番馬蓮華寺鬼簿	河州勸心寺文書	院家雜書文書
采心墨藏	大安寺緣起	鞍馬寺緣起	笠置寺緣起

天台座主記	安井代々門跡茅安井傳記	諸門跡譜
巡禮記	續心法論	南禪寺記
妙心寺記	妙心寺六祖傳	佛國師行狀
一寧禪師行狀	普門禪師行狀	一休年譜行實
御制南禪寺梁牌	鎌倉理智光寺牌	相國寺供養記
直遍言上狀	日蓮注函贊	季瓊日錄
義堂日工集	鎌倉松岡過去帳	一休真跡色紙
後漢書	隋書	善隣國室記
新唐書	五代史	唐書
文獻通考	曲江集	遼史
王維集	古文世編	文苑英華
百濟本紀	通計六百七十餘部	東國通鑑
大日本史贊藪	寫本二卷	唐詩品彙
此書八日本史中紀列傳未了附了	了贊藪影了了	三國史記

第一卷 上中下

中約天下の大勢九変一武家の代又五変せし徳満の事
幼き并は攝政姑の事 関白并は廢立姑の事

宇多醍醐村上三代攝関村上天皇の事
冷泉以は八代攝関村上天皇の事

仁三系攝関の持統の事
上皇神代勢の事 鎌倉殿の掌天下の事

小系陪侍の事 附白皇統を并攝関五流の事
後醍醐復位の事 南北の事

第二卷 上中下
上古征伐天子の事 中世の事おのれ任世及世族の事
源頼朝父子三代の事 北条代々天下の持統の事

第三卷 上中下
北条朝中世の事

足利殿北朝の建らるる事 并小室町代々將軍の事
信長治世の事 秀吉天下の事

假字日本紀 写本 二十卷

此書何人の所為か知らず其書六流布の本乃日本
書紀と題せ又全文りしれ以て漢字の事と和訓
をつけり此本足利家時代の經紳家の寄合書なり
字體も精密なり漢字もつけし和訓も人のつて代々の
私記の訓と存しもの多し頃日本に於ては書體

山問文神代卷 写本 二卷 賀茂真淵

日本紀第一第二の卷に於ては其の事あり右の如く
しるる乃假字日本紀と題し其の事あり○真書
云明和六年正月元日より十一日まで訓畢ぬ 真淵七十二

神書一覽

山言と近ごろあ人の不藏に備覧しつるに梗概と云ふ所の

神書類

神道五部書

写本

五卷

倭姫命世紀一名大神宮本紀

天照坐伊勢二所皇太神宮御鎮座次第記

一名阿波良波記

豊受自王太神宮御鎮座本紀一名飛鳥本紀

伊勢二所皇太

神御鎮座傳記一名太田傳記

造伊勢二所太神宮室基本紀

五部度會の延佳諸書引異中何考つるに

神道十二部書

写本

十二卷

倭姫世紀

御鎮座次第記

御鎮座本紀

御鎮座傳記

室基本紀

天口事書

古老口實傳

御奉仕記

御鎮座本紀

機殿規式帳

心御柱記

神鳳鈔

以上十二部御鎮座本紀

倭姫世紀

写本

一卷

神書一覽

和書部一

四十一

佐了○本書奥書云々于時大神主飛鳥孫御氣書之
神護景雲二年二月七日祢宜五月麻呂撰集之云々
其人と繼體天皇の御氣の孫御氣云々
世紀と云々
定一云々
治四年十二月廿七日書云々外孫祢宜度會神主親晴判
又云丁卯五月書云々豊受太神言祢宜心四位上度會神主章尚
判于時應永廿五年仲夏端午一日書云々
御鎮座次第記 寫本 一卷

此書ハ伊勢大君子命五代の孫内之神を阿孫良心令棟梁し
て二男ハ子今四男ハ子今内宮大物忌荒木田押刀日子赤
冠兼五人撰集し阿波羅波命記云々阿波羅波命今ハ
外宮鎮座以前の神云々長令云々
○二祢宜因彦の家巻の巻の外
云々

御

鎮座本紀 寫本 一卷
此書ハ繼體天皇の時伊勢兩神主飛鳥の代なり故ハ飛鳥
の記云々
○契書云々于時大佐命ハ乃古命蒙テ勅宣奉
仕己酉歲乙乃古命二男大神主飛鳥記之云々
又云平古の章尚の契書云々
又云一の契書云々
代本紀云々 沙弥曉歸 俗名度會神主実相還俗圖書助通俊

此書ハ鎮座付代神記云々
又ハ太神又神祇中紀上下と云々
書ハ中云々
明又文法云々
當宮調所令神代秘書十二卷内神記并飛鳥記以祢宜光
書寫本云々
祢宜度會神主高倫判 此外神主信慶の契書云々

御鎮座傳記 字本

一卷

此書ハ雄略天皇廿二年神宣御蒙りて倭姫命白髮皇女雄略
命大物忌酒目日子押力子等寄合々々太田令の訓傳抄撰集
して秘して置たりしに依りて皇の御宇に虎も令大佐令
し君子令の子に依りて記し子孫に傳へし伊勢十二卷の
事なり猿田彦大伴の所託宣記なり太田の家傳の依り
たや左太田の訓傳にも又ハ虎の記にもつり 慶長五年
乙酉十二月廿六日 神道長上迄二位神祇大副兼侍從卜部
外可禁他見者也 大永初元年己卯上瀛銅駝老人を判
宝基本紀 字本 一卷
此書ハ聖武天皇の時伊勢に述作せられたるものも其作者不明なり
なりしに於て天皇佛は依り信じたるものなり佛に依り

不心のゆゑも伊勢十部十二卷の内宝基本紀上下二巻と
りて此書ハ幾箇の附合なり伊勢の御宇に依りて
を考へしに伊勢の御宇に依りて伊勢の御宇に依りて
壬寅九月二十三日書子之大神と稱宣其木田神に依りて
建保二年甲戌九月十二日書子之荒木田神に依りて
と云 建保二年 延慶二年 永亨十年 明應四年 永正元
年 永正元年

倭姫命世紀抄 字本

二卷

秦信慶

世紀一部の諸書抄引くは其中に秦信慶篇抄引くは
或人抄に依りて人皇二十代欽明天皇の御宇に及々百濟の
法如志の御宇に依りて佛の御宇に及々百濟の
西天八滅の御宇に及々百濟の御宇に及々百濟の御宇に及々
年乙丑差々金人抄に依りて佛に依りて以降なり人

天台僧徒の作とて神佛習合の駁雜なりし卷末に延
暦弘仁の年号有り

神道大意

一卷

ト部兼直

ト部家ニ傳テ唯一の神祇官領ト部兼直ニ傳ル此
書一名萬神元起トテ神祇官領ト部兼直ニ傳ル其
ては多ク神祇一考ニ傳ルトテ多クハ七代ノ傳テ其
外ハ友定家憲法寂蓮等トテ其ノ大ニ附屬セリ定家
ノ盟約トテ生ノ厚ク今ノ傳テ其ノ兼直ハ秋乃モ
通達ノ人トテ新勅撰ノ神祇ノ部此ノ人ノ傳テ日中紀撰
卷和訓抄トテ其ノ意立ノ折々トテ其ノ書カレリ
は多ク神祇ノ傳テ其ノ世ノ傳テ其ノ傳テ其ノ傳テ

神道大意

一卷

ト部兼俱

此書曰ク神道トテ其ノ傳テ其ノ傳テ其ノ傳テ其ノ傳テ
トテ一名神道宗源トテ其ノ傳テ其ノ傳テ其ノ傳テ其ノ傳テ

神道秘説

一卷

卷首ノ神道序有り 第一大意 第二天地開闢 第三

天神七代 第四地神五代 第五三箇大事 第六

三種神器 第七秋津島事 第八千葉破 第九

神祇大副正四位下兼友在判 本右八箇大事者先年平野家

相傳之以秘本字之畢神道之秘説也 長上神祇權大副正四位下

ト部兼益判 ○此書神佛習合トテ其ノ傳テ其ノ傳テ其ノ傳テ其ノ傳テ

ハ母ノ五臟六府胎内ハ葉ノ蓮花也トテ其ノ傳テ其ノ傳テ其ノ傳テ其ノ傳テ

神懷録

一卷

一名詞宝傳大職冠鑑足ク傳テ其ノ傳テ其ノ傳テ其ノ傳テ其ノ傳テ

の伝代五ノ配テ其ノ傳テ其ノ傳テ其ノ傳テ其ノ傳テ其ノ傳テ

其ノ傳テ其ノ傳テ其ノ傳テ其ノ傳テ其ノ傳テ其ノ傳テ其ノ傳テ其ノ傳テ

類聚神祇本源

十五卷

度會家行

卷首トテ天照豐受自玉太神宮祢宜正四位上度會神主家行撰ト

元應二子初陽中旬の直字序り
 天地開闢篇 天地所化篇 本朝造化篇 天宮篇
 内宮遷座篇 外宮御遷座篇 宝基篇 形文篇
 心御柱篇 内宮別宮篇 外宮別宮篇 神宣篇
 禁誡篇 神鏡篇 神道玄義篇
 此書卷々序次帳列せしむる神道玄義篇の奥に化しり引用のちり

周子通書 博聞録 老子道經 古今帝王年代曆
 律曆志 周易 五行大義 淮南子
 元命苞 莊子 神皇実録 先代旧事本紀
 日本書紀 神皇系圖 御鎮座本紀 宝基御靈形文圖
 大和葛城宝山記 天地靈覚書 阿含經 秘藏宝鏡
 圓悟心要 圓覚經 天地麗氣附録 古事記
 古語拾遺 宝基本紀 太田命傳 神祇譜傳圖記

降臨次芽記

和漢春秋

日本私記

切韻

皇受皇太神繼文

統別秘文

中臣枝訓傳

伊勢太神宮秘文

仙宮秘文

大宗秘府

倭姬命世紀

麗氣記

神宝日出秘府

天口事書

形文深釋

神祇式

儀式帳

阿波良波命傳

神記

社記

丹後國風土記

大同本紀

神祇令

格

礼記

瑞器記

灌頂天女傳

右の諸書より實と抄出類聚す卷末に平貞和の号
 神皇心統記說者皆所據類聚神祇本源而所以同於五部書說也
 元集 八卷 北白田親房卿

閑闢より伊勢太神宮の由来地神出生神受傳受ホの起のりまで
 知化せり才ハの巻闕本なり今此刊本才ハ巻序述の圖ハ八人の附
 今せしものこゝろて宝龜二の阿倍東人の跋とのせり

- 第一卷 天地閑闢篇 本朝造化篇 神皇紹運篇
 - 第二卷 天神化現篇 地神出生篇上
 - 第三卷 地神出生篇下
 - 第四卷 神籬建立篇 神國要道篇
 - 第五卷 神器傳受篇
 - 第六卷 内宮鎮座篇
 - 第七卷 外宮遷座篇 御遷幸指圖
 - 第八卷 御遷幸指圖
- 才一卷の中神皇紹運篇ハ作代より後村上天までの系圖とのせ
 才ハ八巻序述の指圖の奥のり右此序述の指圖者元々集
 秘極倫卷也才ハ不可と他見可秘々々々引用書ハ
 日本書紀 先代旧事本紀 天地麗氣府録 宝基御靈形文圖
 御鎮座本紀 大和葛城宝山記 易 周子
 淮南子 五行大義 五層記 莊子

古事記	日本私記	神祇譜天圖	瑞相鎮守仙宮變
天地靈覺秘書	古語拾遺	神皇系圖	神皇實錄
宝基本紀	太田命傳	天叟事書	大宮秘府
太神宮秘文	灌頂天女傳	延喜式	姓氏錄
倭姬命世紀	儀式帳	伊勢國風土記	或書神祇本縁
丹後國風土記	古事記釋註	阿波良波命傳	上代本紀
瑞器記	承應二年二月上本		
元集八卷 写本	一卷 同上		
東家秘傳 写本	一卷 同上		

此写本以て刊中遷幸圖ハ卷ハ易ハ之のなり
 親房卿の眞字序ハ古来日本紀と云ふものなりハ秘
 用中の入知明らめ世に記すの術を識ん欲すとの血
 印の釋典を訪ひ遠く支那の書史と決すの

我國の舊史と覽粗此乃乃所在於了すき都て十箇條令

トて東家秘傳より
天地未判名渾沌也 渾沌之形譬之鷄子也 陰陽初判一物生中也
五行成教各著其德也 陰陽二神產生人物也 變易五行建五八卦
地神五代應五行運也 相生相剋此為順逆 造化之端皆是也
治世要道神勅分明也 以上十箇條各滿り 卷末より東家秘

傳北畠准三宮述作也
廿一社記 写本 一卷 同上

卷首に諸社事とて社名を記す
伊勢 石清水 賀茂 松尾 平野 稻荷 春日
大神社 大俊社 石上 廣瀬 大原野 吉田 住吉
日吉 廣田 梅宮 祇園 北野 丹生 貴船
右二十一社中迹縁起鎮座時代ホのハ記す卷末一品儀同三

司作... 羅山の日本書籍考に諸社記二十一社の
... 櫻雲記卷之中心平十四年北畠准三宮親房撰す
... 此書真本... 應永十三年三月下旬候以
... 弘長元年の撰す

神風和記 三卷 僧慈遍

此書の櫻雲記卷之中より興國元年北畠准三宮親房撰す
風和記三卷撰す
舊事玄義 写本 十卷 同上

旧事紀の撰す此書體天台の妙義の格なり此書の中
會釋了簡閑合如来の佛行の故事の例
... 慈遍ハ伊勢長官の末子ト部の侍なり

十種の神宮の事... 記文... 十種の付... 十種神宮問目 写本 一卷

珊瑚集 写本 二卷
天地開闢の事... 十種神宮の事... 十種神宮の事... 十種神宮の事...

十種神宮の事... 十種神宮の事... 十種神宮の事... 十種神宮の事... 十種神宮の事...

神道集 写本

八卷

卷首... 安彦院作... 神道集... 神道集... 神道集...

大裏神道 写本

一卷

大裏神道の事... 大裏神道の事... 大裏神道の事... 大裏神道の事... 大裏神道の事...

考ゆべの空海三派の巻も号すは圖の赤も持中御言家長
日記大御言安世家記如引く此圖傳は歩瀟記本の御言
○陽成帝の時南光坊天海禁裏より二圖を讚む
西都神々の通記に説きりる靈感候しむし大内侍乃の
祿号下しむし此も大裏侍乃の号せりし

西都神道口決鈔

六卷 源慶安

此書は空海の西都神道二圖の抄なり源慶安と云くは
西都稱号なり宗派に依ていし令剛界胎藏界より建す
くこの抄なりし因て令胎藏界以西都の名称を稱号
以來いしとも重徳太子兼學兼用の神道と云く勅号
は神乃仁道の西都中古儒門のそがし神乃儒乃一致
唯一神乃号すなりし西都神乃乃の号し回して大
是なりし○正徳六年孟春武陽青地祐來序同年源慶安跋

西都神道口訣心鏡錄

五卷 僧鳳潭

卷首は大日城京西華嚴寺住持僧瀟鴻潭撰し此書は西都
神道口決抄の下の西都神道の二圖空海の作なり
神道は天海の細注一貫の口訣一くは神實すは皆故なり
かゝるの條記ししは神道一條は駁言なりしは神
下し詳悉なり

神道八重垣傳

五卷 藤齊延

大よはを垣りし天の限は遍満し残るは萬物なり
はを垣り其真中と天上より天の沖より坐し萬物生
しを不易くし地よ八重垣あり地の限遍満
し餘すは萬物なり其真中と伊惠利し國
津神よ坐し萬物生すは皇帝よ八重垣あり皇帝
の八重垣は神會限は遍満し餘すは萬物なり
るは中河系ありは皇帝よ坐し天の益人等皆偏傍

かゝる治教を布けし國々を垣けりしは、其の地
 ハ主宰の居れ鎮するを、其の地を其の地
 八重垣傳者亦述焉

神道名目類聚抄 六卷

宮社神宝祭器幣帛冠履衣衾及社司の職等、
 西野殿某自序、
 類記別りしもの、舊記に依て其義を釋す、
 元禄己卯六月、

- 第一卷 宮社部
- 第二卷 神宝部
- 第三卷 祭器部 神官服部
- 第四卷 神祇部
- 第五卷 祭祀部 神官部
- 第六卷 雜部
- 陽復記 二卷 出口延佳

收光明院の慶安年中勢州外宮の初友出口信は、
 此書承應年中、
 復記、
 神宮秘傳問答、

伊勢西宮の、
 延良、

古今神學類聚鈔 百卷 真野時繩

此書百卷の中、
 神階篇 十二卷
 諸院篇 六卷
 祭物篇 四卷
 已上三十三卷、
 七卷、
 一、

群書一覽

和書部一

神社考 詳節

一卷 同上

神

八卷

白井宗因

此書は尾河源ぬ君のあま化して...
 序例或同物目一卷... 諸國の靈祠...
 邑の... 大概... 諸書...
 大臣の... 羅山の... 世の...
 代々... 寛文の... 白井宗因...
 社啓蒙中... 後白雲... 啓蒙の...
 二三策の... 家の... 今世...
 ...

神社便覽

一卷

同上

春日権現験記

二十卷 五本

稲荷の社人秦公建の序あり
 卷首に春日権現験記繪目錄あり 第一卷承平記宣のり
 第二卷嘉元神火のり... 春日大明神靈
 験の... 繪... 右近大夫將監高階
 隆兼 詞ハ 第一卷より 第五卷まで 鷹司前関白基忠公
 第六卷より 第八卷まで 藤原公成冬平公 第九卷より 第十三
 卷まで 前関白基忠公 第十四卷第十五卷 持大納言冬基卿
 第十六卷 基忠公 第十七卷第十八卷 一乗院良信僧心
 第十九卷第二十卷 冬基公 ○目錄の次に延慶二年三月左大臣
 右近大夫... 白父... 四人... 約諾せし
 志懇切の餘結縁のあり他... 約諾せし

いしころく篇目は概して八景系は下らぬが、
前の大徳の慈信筆意は相法に記す予者一の未筆が稟て専當
社の擁護に仰きぬ神の懇志に耐す諸人の仰信に堪へぬと大
概にこれ類多す逐くれ切瑳し、
○奥書、之宝徳二年庚午三月下旬頃於社頭書字畢則以心本校
合畢、権預祐識判、外寛永宝永の神々の奥書なり

春日神社記改訂写本 二卷

序、故の神に預祐舎、於此社記一篇何著述するの及祐
舎竊に若くは神の家藏の記に因り、
社記改訂めん、
是す其志とつん、
神す竟に改訂し、
位中臣連延英序、
小社九社

てくれぬ澄す、
日吉社神道密記 写本 一卷

巻首に祢宜正四位下大藏卿行九致而撰述し、
大宮二宮 聖真子社、
其餘、
巻末に社務祝部の素園大宮方二、
住吉秘記 写本 一卷

住吉秘記 写本 一卷
住吉四社の在、
墨江紀畧 二卷 巨妙子

往吉社偈、
寺等の、
十巻首に享保丁酉九月の自序あり、
八幡宮本紀 七卷 貝原好古

自序より八幡大神ハギの文武の祖より伊勢より二所の家
 廟より神史実録より祠官の録より故老の傳より
 卷之一 仲哀天皇紀 卷之二 卷之三 神功皇后紀上下
 卷之四 應神天皇紀 卷之五 仁徳天皇紀
 卷之六 惠徳天皇紀 考謙 天白王時代より身利の代より八幡文の神
 威のいりしより縁起より実等松舊史雜編より考つてこれ
 をより千〇附録一卷より諸心より名るき八幡社の不立松より
 岡宮崎の園附す〇卷首より花山院の内府定誠公元禄辛未年
 の序貝原篤信序好古自序より巻尾より松下見林の跋より元禄
 十年刻

太子流 神秘 卷 写本 二卷
 卷首より二相大悟四武の圖一切 成就劍の圖より〇巻末より
 右太子流の軍要の明貫より一人傳りて鬼一傳りて鬼一

義経の傳より其の甲斐の坊正成の傳より傳りて人ハ南面より人
 ハ北面より一傳りて其の甲斐の坊正成の傳より傳りて人ハ南面より人
 傳りて中より一子相傳りて秘一傳りて他は傳りて一子相傳りて
 傳りて上より一子相傳りて秘一傳りて他は傳りて一子相傳りて
 新兵衛尉於今陽城下字一慶安四年 一伝りて山崎より月新兵衛
 太子流の軍書都合四十九卷 卷中二相大悟一卷 相傳りての謝
 橋家神體勸請卷 写本 一卷
 神祇御法の傳と種御法の傳 序に御法の傳末十一箇条秘傳
 圖より 卷末より玉木心英奥書より
 橋家意目口傳 写本 九卷
 玉木心英の聞書口傳秘 一卷 口傳卷 一卷 橋家鳴弦傳

三卷 橋家鳴弦卷極秘 一卷 抄計九卷多々圖をりしをせり
興 名草前後編 写本 一卷 浅井重遠
橋家神軍のゆかり説ししをいふ字くしりけり 舊中紀真徳天皇の
ゆかり奉たり未編の右の右の厨鴨の祐著述しり 玉方陣記とハ
了の要ききし此記橋氏薄家之書也薄家天正十一年の五位下
左衛門佐佐木光有故而廢焉其裔橋を信以神功後子池田
家遂去其子信秀傳く以信藏とせり

玉 載集 写本 八卷十本 玉木心英
玉木尊斎垂加の記何記しし書かきしりしめ天神唯一の傳
四化の付上金の傳おしり終り垂加靈社所奉の傳雷除守の傳ふ
りしりしり百二十八箇條の神人の傳何のせりしり卷末ハ片屋
形の製九帳の製屏風の製壁代の製等八箇條を附しりしり

原根録 写本

三卷 同上

卷之上 三種宝物の傳 卷之中 同 卷之下 神籬般名境の傳

加靈社心傳 後一位權大納言公通卿直授 玉木心英謹書 花押
宗廟社稷答問 写本 二卷 源幸和
本於宗廟社稷と稱すしり伊勢二所太神とを以てしり
別りし餘ハ社稷とすしり外宮ハ國常と尊儀祭て以て大祖
了都鄙の稱すしりしり神宮五部の書親房兼俱の記
近世道春宗因見林時繩の記おしりしり其の
すしりしり宗廟と稱すしりしり其の
すしりしり社稷と稱すしりしり其の
すしりしり社稷と稱すしりしり其の

上内藏院院係物作誠し序曰しり九月男後五位下守大孫大夫

神書一覽

直ぐに神をたすむるは女にくむりこれのたすむるは
かゝるに神をたすむるは女にくむりこれのたすむるは
のちをたすむるは女にくむりこれのたすむるは
義徳の旧名

三種神器辨書 写本 一卷 同上

くゞめ壺井鶴翁の記にあげて、有知者す。○附録 三種
神器所相付器記 代々神皇相承の次第に記す。卷末に多田義
俊の授筆記の有り。上田克秋考す。

神明憑心談 二卷 同上

上卷 神代人代の差別 日本紀と撰す旨趣 日本紀とよむ用
意 両部唯一并に神秘の有り 神國獸肉の考
下卷 神紀とよむ旨趣 和訓考 中臣忌部職掌考
木綿織の考 大國の産物神は、内ひきやの考 其餘雜考
と記す。○此書義俊の口授と郡山の松次祝の記せし。郡守佐

獸肉論 写本 一卷 同上

永康の跋り、享保甲寅義俊自序
猪鹿の神事、いむりて神代より五十六代迄
天皇の神宇までハ天子の所饌ももり、世文ととりけ
これに記す

神道辨惑 二卷 持宝院聖應

伊勢兩宮の有り 神代五部書の有り 託宣の有り 祈祷の有り
聖徳太子の有り 両部習合の有り 天孫の有り 山崎垂加の有り
大岩戸の有り 大宰辨道士の有り 林氏我の記述す。わたり
の有り 其餘種々の論も、神代者、稱す。の有り 足袋の記述と
赤し多田義俊の考す。賞す。毀す。の有り 卷末
文の五の二月生玉社傍持宝院金剛佛子聖應、識せり。

神京問答 写本 一卷 大江吉利

神書一覽 和書部一

神代卷 二卷
日本紀第一卷第二の巻なり。〇活字本行ハ勅板ト稱す元龜の
中親町依の刻せられたり。外題ハナレトシ元龜帝の
宸翰なり。好古日録云々

天祖都城辨

一卷

本居宣長

明和の仕或人神別や紀天照大神の都ハ豊前國中津なり
り記は作一々天祖都城云々一巻なり。一々天祖の
都ハ大倭國なり。滿せり今ハ都城の地ハ神代
て、の辨ハ切りしなり。〇天祖都城辨の今ハ古の
のせり。好古日録云々

神代卷

二卷

神代口訣

五卷

忌部正通

此書ハ光嚴依ハ自法中ハ成リ神代紀トシテ佛教トナリ
し。此書の凡例ハ神道自不異ニ教者天地之道理也。ハ
つ

日本紀神代抄

十一卷 五本

此書ハ位宣賢ハ獻ルハ神書講釋の時のナリ。宣賢ハ
塔檀那院抄の跋なり。〇宣賢ハ曰ト部氏の秘説ト以テ一
行違背せず。これハ抄す。纂統ト至テハ思意ハ以テ私ハ
知ルハ。〇宣賢ハ此書宣賢トテハ宣賢ハ
以テ私ハ。宣賢ハ此書宣賢トテハ宣賢ハ
ハトハ兼俱のハ。宣賢ハ此書宣賢トテハ宣賢ハ

日本書紀神代合解

十二卷

忌部正通の口訣 ト部兼俱の抄 大外記環翠の講義 此と部

所分せくわらうごまはみよ○自治丁未忌部正通が口訣の序其
長己亥法永國良の跋と載編者いよと考一す寛文四年刻

神代講述抄

五卷

山本廣足

越前の山本廣足閑齋一考す此人勢州の出口延佳の撰記
とすまきししちし寛文十二年壬子延佳五十八歳の時

神代評註

四卷

龍瀬近

瀬近の勢州の初友龍傳右侍つと稱す神代習合の記し河合
圖書近貞の序あり

神代紀上秘解

写本

十五卷

源雅胤

卷首に神代紀の總論あり神代紀と巻紙片くれくれと記せり
毎巻のくくれめは神祇学頭源雅胤奉勅述しり

神代巻風俗抄

写本

五卷

秦信慶

釋日本紀纂疏環翠抄講述抄科解等の記しけり
記しけり

神代巻訓義箋

写本

二卷

高屋近文

平安城下士收駿高近文自序し云はし未の冬此書の記し
と編述せんし其序の初友伴の撰令種大宅の作光後光
世光は光直光起等と約すふりも吾は多病して

す時は享保二年本丁酉春正月晦に至りて予の稿と脱す
るすすす○巻末もも素なりしつべりる序のくさひつげり

親しきまじりし書なりをえせりの花も実もなすか
つよとかがりしもの

このまよくちりやとくへんそくしりやまよかたはハルテ

日本書紀三三卷

四卷

横山當永

群書一覽

和書部一

らう今雲翁博く古書に採てす其編所の旁通の切夫發明す
とらんま一蓋延氏式よのすらん大後の微意は因く諸葉州
に以てしるるるのくま

中臣後大全

十卷

浅利太賢

卷之一 考姓 卷之二 講解 卷之三 至誠 卷之四 守後
卷之五 洪啓 卷之六 懲勸 卷之七 神宣 卷之八 以敬
卷之九 為要 卷之十 安之

元禄二年九月自序同三年秋自跋

六根後松風鈔

一卷

藤原永弘

中臣後松風鈔

一卷

同上

假字といはす六根後の末は唯一神道傳脈畧記と附す
享保五年六月青木主計頭藤原永弘奥書にこれより長崎石本
縫殿指資彫刻す

中臣後古義

三卷

松崎義克

此後常磐大連の他は種子令の他とす
松崎義克ハ多田義俊の門人なり此書よのす
松崎義克ハ多田義俊の門人なり此書よのす
松崎義克ハ多田義俊の門人なり此書よのす

中臣後氣吹抄

三卷

多田義俊

此書は座障の圖 行障の圖 翳の圖 稻插の圖等
辛酉の三月義俊跋

六根清浄大後浅説

一卷

宮城春意

此後八欽明天皇の御時常磐の大連の他とす
都家相傳の云

此書、祝詞解とすべし、いづれ考へて、いづれ考へて、
こゝろ、明和五の自序に、序中、祝詞の、
も、祝詞解、いづれ考へて、いづれ考へて、
楓校、いづれ考へて、

大祓詞後釋

二卷

本居宣長

真淵の祝詞考の中、大祓の考、いづれ考へて、
下卷の附録、大祓の祝詞解、いづれ考へて、
中、いづれ考へて、いづれ考へて、
出雲國造神壽後釋、二卷、同上、
いづれ考へて、いづれ考へて、
の序、いづれ考へて、

雜史類

水鏡

三卷

中山内府忠親公

神武天皇より仁明天皇まで、
いづれ考へて、いづれ考へて、
卷首、他者の自序、

水鏡異本

三卷

いづれ考へて、いづれ考へて、
いづれ考へて、いづれ考へて、
いづれ考へて、いづれ考へて、

六鏡

八卷

藤原為業

いづれ考へて、いづれ考へて、
いづれ考へて、いづれ考へて、
いづれ考へて、いづれ考へて、

らうれ業花おけねし〜世は〜あはれ能くす
 ねけらひむけ〜世の〜世は〜あはれ能くす
 少〜男子の他〜あはれ能くす
 け〜入拾芥おのせ〜定家押紙〜世は能くす
 花おけ〜又山あまの宮女七條のや〜あはれ能くす
 赤備〜あまを考〜夫匡衡〜あはれ能くす
 團〜あまの〜あはれ能くす
 存せ〜あまの〜あはれ能くす
 こと〜あまの〜あはれ能くす
 カ〜あまの〜あはれ能くす
 あま〜あまの〜あはれ能くす
 つ〜あまの〜あはれ能くす
 なま〜あまの〜あはれ能くす
 い〜あまの〜あはれ能くす

〜あまの〜あはれ能くす
 第一 月宴 唐保カラホウの四月十五夜清浄セイジョウの月宴ツキウチを
 第二 花らあゆ言 寛治の六月十日常トコノあはれ能くす
 第三 ちあやせのちあゆ言 義徳のあはれ能くす
 第四 えんあま 栗田のあはれ能くす
 第五 相如アヒカのあはれ能くす

〜あまの〜あはれ能くす
 第一 月宴 唐保カラホウの四月十五夜清浄セイジョウの月宴ツキウチを
 第二 花らあゆ言 寛治の六月十日常トコノあはれ能くす
 第三 ちあやせのちあゆ言 義徳のあはれ能くす
 第四 えんあま 栗田のあはれ能くす
 第五 相如アヒカのあはれ能くす

長保二

七十一

才六 三ヶ 入田 三ヶ ちやちるば 長保二の十月朔日 白殿の所者十二にて

才七 三ヶ ちやちるば 長保二の十月十五日 白殿の所者十二にて

才八 三ヶ ちやちるば 長保二の十月廿二日 白殿の所者十二にて

才九 三ヶ ちやちるば 長保二の十月廿二日 白殿の所者十二にて

才十 三ヶ ちやちるば 長保二の十月廿二日 白殿の所者十二にて

才十一 三ヶ ちやちるば 長保二の十月廿二日 白殿の所者十二にて

才十二 三ヶ ちやちるば 長保二の十月廿二日 白殿の所者十二にて

才十三 三ヶ ちやちるば 長保二の十月廿二日 白殿の所者十二にて

才十四 三ヶ ちやちるば 長保二の十月廿二日 白殿の所者十二にて

才十五 三ヶ ちやちるば 長保二の十月廿二日 白殿の所者十二にて

才十六 三ヶ ちやちるば 長保二の十月廿二日 白殿の所者十二にて

才十七 三ヶ ちやちるば 長保二の十月廿二日 白殿の所者十二にて

才十八 三ヶ ちやちるば 長保二の十月廿二日 白殿の所者十二にて

才十九 三ヶ ちやちるば 長保二の十月廿二日 白殿の所者十二にて

長保二

和書部一

七十一

才十九 涉シ堂モキ

以事の四月朔日一シ...

才二十 所シ賀ガ

口の十月十三日...

才二十一 梅ウメのノ

万葉の正月五日...

りら小松の信おの靈...

あぢの信おの靈...

才二十二 三ミのノ香カ

口の月夜夜を...

りら三の香の...

也...

才二十三 為ミのノかカまマ

口の九月十九日...

才二十四 三ミのノかカまマ

口の九月十九日...

の里かま...

の里かま...

才二十五 三ミのノかカまマ

あぢ

才二十六 楚シのノまマ

尚ナカの...

ハ月男オウミコの...

納めり...

才二十七 三ミのノかカまマ

口の九月十九日...

かの...

かの...

女の...

かの...

才二十八 三ミのノかカまマ

口の九月十九日...

かの...

才二十九 三ミのノかカまマ

口の九月十九日...

かの...

かの...

才三十 三ミのノかカまマ

口の九月十九日...

かの...

侍従... 隆方... 中... 勝範... 保... 大井... 勝範... 保... 大井... 勝範... 保... 大井...
 侍従... 隆方... 中... 勝範... 保... 大井... 勝範... 保... 大井... 勝範... 保... 大井...
 侍従... 隆方... 中... 勝範... 保... 大井... 勝範... 保... 大井... 勝範... 保... 大井...
 侍従... 隆方... 中... 勝範... 保... 大井... 勝範... 保... 大井... 勝範... 保... 大井...
 侍従... 隆方... 中... 勝範... 保... 大井... 勝範... 保... 大井... 勝範... 保... 大井...
 侍従... 隆方... 中... 勝範... 保... 大井... 勝範... 保... 大井... 勝範... 保... 大井...
 侍従... 隆方... 中... 勝範... 保... 大井... 勝範... 保... 大井... 勝範... 保... 大井...
 侍従... 隆方... 中... 勝範... 保... 大井... 勝範... 保... 大井... 勝範... 保... 大井...
 侍従... 隆方... 中... 勝範... 保... 大井... 勝範... 保... 大井... 勝範... 保... 大井...
 侍従... 隆方... 中... 勝範... 保... 大井... 勝範... 保... 大井... 勝範... 保... 大井...

七 白河の花の宴 保安五... 白河の花の宴... 保安五... 白河の花の宴...
 鳥羽の... 仁平... 鳥羽の... 仁平... 鳥羽の... 仁平...
 春の... 天... 春の... 天... 春の... 天...
 第三... 下... 第三... 下... 第三... 下...
 平安... 南... 平安... 南... 平安... 南...
 直... 直... 直... 直... 直... 直...
 八十五

和言部一

八十六

廿 久喜の 十月二日 昔もあつたかゝりしとてせのよき

廿一 久喜の 九月廿日 内宴のよきたす

廿二 ひなのよれ 保名田の 内宴きて花嫁のよきなりし女さし

廿三 花ふげのよし 二条池 市母の六箇言経実のよきなりし大御所のよ

廿四 君は國のたのやのよきなりしはのよきなりしはのよきなりしは

廿五 久喜の 應保二年位よりせよきなりしはのよきなりしは

廿六 久喜の 道きなりしはのよきなりしは

廿七 梅のよし 久喜の 梅のよきなりしはのよきなりしは

廿八 梅のよし 久喜の 梅のよきなりしはのよきなりしは

廿九 梅のよし 久喜の 梅のよきなりしはのよきなりしは

三十 梅のよし 久喜の 梅のよきなりしはのよきなりしは

三十一 梅のよし 久喜の 梅のよきなりしはのよきなりしは

三十二 梅のよし 久喜の 梅のよきなりしはのよきなりしは

三十三 梅のよし 久喜の 梅のよきなりしはのよきなりしは

三十四 梅のよし 久喜の 梅のよきなりしはのよきなりしは

三十五 梅のよし 久喜の 梅のよきなりしはのよきなりしは

三十六 梅のよし 久喜の 梅のよきなりしはのよきなりしは

三十七 梅のよし 久喜の 梅のよきなりしはのよきなりしは

三十八 梅のよし 久喜の 梅のよきなりしはのよきなりしは

三十九 梅のよし 久喜の 梅のよきなりしはのよきなりしは

四十 梅のよし 久喜の 梅のよきなりしはのよきなりしは

和言部一

八十六

保氏のもの... 保元物語... 世継物語... 此書ハ一名宇治大御言... 保元物語... 世継物語... 此書ハ一名宇治大御言... 保元物語... 世継物語...

世継物語

一卷 或ハ二卷

保元物語

三卷

此書ハ一名宇治大御言... 保元物語... 世継物語... 此書ハ一名宇治大御言... 保元物語... 世継物語...

報恩院

報恩院... 年七月兵乱の始末... 白河の所見... 忠臣の事... 報恩院... 年七月兵乱の始末... 白河の所見... 忠臣の事...

平家物語 嵯峨本

十二卷

俗間より出づる角藏素菴の藏版... 其刻版嵯峨の角藏より出づる嵯峨が稱す此外數十種の書は刻すまゝくハ光悦素菴より筆迹なり。○流布の印中字は第一巻の目録の目錄に祇園精舎のハキキと云ふものあり。此平家物語者中院前中納言以諸家本本校合之給者也

平家物語抄

二十四卷

作者詳し十二卷各二十下... 二十四なり。此物作部の日記... 鈔傳記國經等の説に依りて其の事なり。鈔... 下... 條... 海... 記... 卷末... 刊... 至...

東鑑

五十二卷

鎌倉代日記なり高倉院治承四年源頼朝伊豆の國より... 宗... 時... 源... 禪寺... 寛永元年... 文... 撰... 後... 龜山院... 紀... 之... 不... 易... 而... 國... 之... 大... 事... 及... 畧... 之... 所... 謂... 不... 賢... 者... 識... 其... 小... 者... 而... 已... 矣

和書部一

才九十六代光嚴院より才百四代はむ因依しむるべきの事
記せり。次、當今と稱しむるは土師氏の事なり。○其書曰
神皇正統記至千後醍醐院令録之全部也。光嚴院以来繼
嗣奉加載之為補老後之志氣也。匪敢為續集矣。小槻宿
祿判明和丁亥歲正月阿波源元寬序を附し、刊行す。○
梅下、東見記、續神皇正統記二十卷と云ふ。○其書曰、
櫻雲記、寫本、三卷、何人の他なり。○

此書何人の他なり。○南朝の事、片假字と記す。
上卷、醍醐天皇の即位文保二年二月より延元と云ふ十二月
主上潜、都松逃出たり。吉野へ遷幸し、楠正行來りて
護し、之を以て記す。
中卷、延元二年、北京建武四年、南朝は醍醐帝、北京光明院、正月尊氏
式部大輔賴兼、以て奥州の管領とし、同八月奥州の凶徒、

起す。○平二十四日、北京安永二年、十二月、南朝の
は屬す。○和河内紀、伊賀伊勢志摩飛騨信濃上野越前越
中伊豫備前石見長門肥後日向大隅薩摩都く廿箇國、
の、北國、宗良、祝王、九、懷良、祝王、勢州、北畠國
司ら。○
下卷、建徳元年、北京安永二年、後龜山院帝位より、
して、長祿二年、
月廿七日、夜、赤松が族、真嶋が家僕、中村強、南朝の、
殿、去の、び、入、新帝を害し、を、決、至、奪、採、
野の、鄉、民、急、追、中村を殺す、真、多、決、
内裏へ、敵、南朝の、
吉野の、白、鹿、の、
の、
の、

南朝紀傳 四卷

後醍醐天皇の元弘元年より稱光院の應永二十四年まで

の事其の中南朝の事ハ其ノ中庚辰より公平二十二年まで廿七の

梅松論 一卷

作者不明なり太平記軍の起るの事と記す梅松

伯耆卷 二卷

後醍醐天皇紀の圖より伯耆へ遷幸の事記す

船上記 一卷

同帝隠は國より伯耆國船上山へ遷幸の事記す太平紀

吉野拾遺 四卷

吉野拾遺ハ南朝の事記す歴

の事ハ其ノ中... 吉野拾遺ハ南朝の事記す歴... 史公氏ハ採拾... 吉野拾遺ハ南朝の事記す歴... 史公氏ハ採拾... 吉野拾遺ハ南朝の事記す歴... 史公氏ハ採拾...

正成一人其号何の事 抄号不定なれども主惠智教の圓等と令
したるはよ叶ふに信成主等と令しと物依のあななりは虚実相
依の事これ相再記す元亨釋書のゆへ余は序の書せしむ
号前記すは又建武のははひし上りて在りし時大なる
ふりし五大院の右傍にありし代のおもひく山門の遺山依
しこれ相記せし正成の死せしは神智仁勇れ二徳と備へ
感感の何より善智坊に下りて作せしむし相記せしむ
南岸坊に依り信義員の奏状を氏の愚謀直義の愚逆相記す十
三十四の巻し時主義貞の相根の合紙を自記す共は十四の巻
数年相記す南帝の公平の比依など即ち徳入道が吉野より
新帝の勅に依り京中の合紙を氏の敗北と記す十五の巻に
良侯の合紙を案しこれ相記す又十二の巻直義主惠と令し
相記す時は直義主惠と識し曰く此書十巻以てはこれ
すきやくし主惠曰断りしは此代の人又此代の相記す

れりしはこれ相記すの事いんむ何の事 直義書何の事
向し元弘の政の事いんむ何の事 直義書何の事
直義が二代の愚逆相記す十二の巻しゆはなは成りし
念のゆへは多の事天下に内相記す求めこれ相記す今二十
二の巻相記す 當代よりこれ十二の巻に二十
二集の事 二十二の号しむわらま成りし此書と
記す十二の巻し作者の人教圓上人南都の人義清法師
の事いんむあまは何の事いんむわらま市の人北畠
相家の事 二十の事いんむ出家法師行多の号す歌人の建者
證意法眼真相も此行作し日野入蓮秀の号し而して十一の
巻よりいんむ虚実と云ふ次第相記す 虚を除き実相
いんむ永徳壬戌山名氏清南方を発向し相記す時義用義可
等と作せしむ相記す 五巻都合と十九巻此は書相記

群書一覽 和書部一

阿部

卷之五 永享十一年の改元未吉 卷之四 宝徳二年の

卷之五 寛弘十年の

卷之六 享保四年の康元元年二年長祿元年の

元年東下野守常緑舟友入る意念山田の兵と押領せしめ

てね述懐十首の

りつひの懸念の

卷之七 文明二年の

の柳のせし

神明鏡

二卷

神武天皇より花園院の時代までの

文明一統記

應仁の乱

の

日本王代一覽

七卷

林春齋

若狭國主

五月法眼春齋林恕自跋

本朝編年小史

本朝歴史略評註

作者詳

心純家蓄

釋史小説之中治乱勸懲之要

○目錄の初よか

典類二十二部の名

大臣庶

の

とて仔細に附す元禄の自刻

和漢合運圖

四卷

慶長年中洛下圓智重撰系考ハ系於要はるの世雄房日記
○及古櫻の和漢合運慶切記ハ山城嵯峨住吉田光由の作也

和漢編年支合圖

一卷

正和四年東海の虎園初布化なり

皇清年代記

写本

一卷

慈鎮和尙

愚管抄のくわめ附すくのみをくらひし

年代記

一卷

享祿年中仙波実海を編す

如是院年代記

写本

六卷

卷第一 人皇第一代神武天皇元年より第六代孝元天皇五十七年
卷第二 人皇第九代天智天皇元年より第十五代神代天皇百九十九年
卷第三 人皇百十六代應神天皇元年より百十八代孝明天皇七年

和漢年契

一卷

高祖

卷第四 人皇二十九代天智天皇元年より第六十二代村上天皇康保四年
卷第五 人皇六十三代冷泉院安和元年より第九十代後宇多院弘安十年
卷第六 人皇九十二代伏見院應元元年より第九十八代親明院元應元年
○奥書云右如是院年代記以林祭酒藏本校合畢

此書卷代開けが直に六十年と一覽すぐ上層ハ皇朝の年代にして
神武天皇より今の享和に至る下層ハ漢土の年代にして周の平王より
今の嘉慶に至る又中層ハ文治の初より將軍家此年代ハ中層より
りあるすの頼朝卿より當時に至る也○和漢帝王の御諱世系ハハ
ハ歴代の治乱大人君子の薨卒等皇朝ハ國史大日本史其他諸の史
録より採摘し土層以上ハハ漢土ハ通鑑二十史等より
採出しく下層の下はハハ各主の年紀を考○編首ハ和漢帝王索引歴代
年号索引和漢帝王系圖等を附し卷末ハ皇朝年号改元索引と

附す〇凡例の末に皇朝大化已前の異年号抄ありしゆをかくし
まじりてふり〇寛政八年十月津國三村其原序同九年夏越前
中丸光致らて同年上木す

掌中和漢年契

一卷

和漢年契と抄畧しとく旅行の便覧よりな
る袖珍本なりこれと和漢ともより十年と一紙小列せり干支を
ていへば一葉より位に定められぬ數十葉を隔けしつても其
格と照しとく求むる煩はしす年号は檢出するは巻首
小索引ありとく首字と書數にて分りてり巻尾は慶長以来の
年号改元索引を附す享和元年陸可考は序らる

